

用排水路設計指針 平成 20 年 5 月 正誤表

開水路編			
ページなど	誤	正	摘要
開 P2-3 表-2-3-1	備考欄 8 行目 等高線間隔は、 $t$	削除	
開 P3-4 図-3.5.1	[型(形)式]10 行目 桁落下型	訂正 桁落下型	
開 P4-3 本文	9 行目 $Q$ : 流速	訂正 $Q$ : 流量	
開 P4-11 表-4.6.1	V 型コンクリートトラフの呼び名欄 $V$	訂正 $V$	2 桁表示とする。
開 P5-7 表-5.2.3	2 行目 もたれ擁壁	追加 もたれ式擁壁	
開 P5-23 表-5.3.6	1 行目 バーチカルドレン工法	追加 バーチカルドレン工法	
開 P5-24 本文	4 行目 改良深さの最大は $h=2.0\text{m}$ する。	追加 改良深さの最大は $h=2.0\text{m}$ とする。	
開 P5-27 本文	下から 2 行目 ・設計杭長(支持力算定に用いる長さ)は、先端削り部分を除く。	削除	
開 P5-29 図-5.3.7		訂正 	

ペ - ジなど	誤	正	摘要
開 P6-7 図-6.2.2	U型トラフの寸法表 敷幅	訂正 呼び名	
開 P6-29 本文	下から 6 行目 コンクリートの磨耗等	訂正 コンクリートの磨耗等	
開 P6-31 図-6.3.15		訂正 	

パイプライン編

ペ - ジなど	誤	正	摘要
パ P3-10 表-3.7.1	下から 1 行目 強化プラスチック複合管の設計水圧 1.35	訂正 1.3	
パ P5-10 表-5.4.3	7 行目 その他の S、SG、SF のとう性管設計支持角 60	訂正 90	
パ P5-12 表-5.4.6	下記注記 2 行目 極めて軟弱な膨張する	訂正 極めて軟弱な膨潤する	

**排水路編**

ペ - ジなど	誤	正	摘 要
排 P3-10 本文	14 行目 n : 粗度係数[「 <u>土地改良事業計画設計基準</u> ・・・」] 下から 1 行目 日雨量・日排水の考えを	訂正 n : 粗度係数[「 <u>4.3.2 粗度係数</u> 」P 排 4-6]  日雨量・日排水の考え方を	
排 P3-11 図-3.4.3 図-3.4.4	タイトル 日雨量日排除の考え方 4 時間雨量 4 時間排除の考え方	訂正 日雨量、日排水の考え方 4 時間雨量、4 時間排水の考え方	
排 P4-7 表-4.3.1	6 行目 かがマットの粗度係数 <u>0.017</u>	訂正 <u>0.032</u>	
排 P6-2 表-6.2.1	留意点欄 8 行目、11 行目 <u>処理及び固工寄せ石等を</u>	訂正 <u>処理は寄せ石等の根固工を</u>	
排 P6-17 本文	4,5 行目 (B) 底幅 1.5m を超えるものについては、中央部の概ね 2~3 枚程度 <sup>1</sup> を幅広 (B=0.4m) の USP1 を用い、 <u>引張側を下面<sup>2</sup>になる様布設する。</u>	訂正 (B) 底幅 1.5m を超えるものについては、 <u>下面からの反力に加え、冬期その他荷重<sup>1</sup>に対応させるため、中央部の概ね 2~3 枚程度<sup>2</sup>を幅広 (B=0.4m) の USP1 を用いる。</u>	
排 P6-17 本文	6~8 行目 1 底版の中央部とは路線が道路沿いであれば積雪の影響、風向きによる吹きだまりの影響、日照方向の影響等が考えられるため、必ずしも中央に位置するとは限らない。 2 積雪荷重、スノーブリッジ解氷に伴う氷塊による衝撃荷重等による影響を考慮。	1,2 の入れ替え及び語句の追加 <u>1 積雪荷重、スノーブリッジ解氷に伴う氷塊による上面からの衝撃荷重等による影響を考慮</u> <u>2 底版の中央部とは路線が道路沿いであれば積雪の影響、風向きによる吹きだまりの影響、日照方向の影響等が考えられるため、必ずしも中央に位置するとは限らない。</u>	

資料編

ペ - ジなど	誤	正	摘 要
資 P1-11	<p>設問、下から 5 行目</p> <p>..... 松杭(木杭)を摩擦杭とした設計を行う際に先端を角すい形に.....</p>	<p>追加</p> <p>..... 松杭(木杭)を用いる場合の長さ区分はどうするか。</p> <p>番号の訂正</p> <p>..... 松杭(木杭)を摩擦杭とした設計を行う際に先端を角すい形に.....</p>	<p>の追加により 訂正</p>
資 P1-11	<p>回答、下から 13 行目</p> <p>..... 松杭(木杭)の設計にあたっては基本的に杭径と杭長の決定が.....</p> <p>下から 1~4 行目</p> <p>.....<u>ただし、現地試験等により、一定の施工条件を設けることによって粘着力の発生が期待できる場合にあつてはこの限りでない。</u></p>	<p>追加</p> <p>..... 一般に市販されている長さを用いて設計するものとする。なお、標準としては「1.8m」、「2.7m」、「3.65m」、「4.6m」等と区分されている。</p> <p>番号の訂正</p> <p>..... 松杭(木杭)の設計にあたっては基本的に杭径と杭長の決定が.....</p> <p>削除</p> <p>.....<del>ただし、現地試験等により、一定の施工条件を設けることによって粘着力の発生が期待できる場合にあつてはこの限りでない。</del></p>	<p>の追加により 訂正</p>
資 P2-6 本文	<p>4 行目</p> <p>・ ・ 算定河川側手法 ・ ・</p>	<p>訂正</p> <p>・ ・ 算定河川側手法 ・ ・</p>	<p>算定より改行</p>